

平成二十四年度 大学院人文科学府修士課程第2期入学試験問題 (小論文)

社会人入試 一般社会人コース

(哲学)

問題 次の文章 (別紙) を読んで、幸福について論じなさい。

人は自分を個人と思ひ込むことによつて、幸福をも個人の領域に閉じ込める。財産や地位など有形のものも、愛情や自由など本来無形のものも、ひとしく個人の「所有」とみなして、その所有を幸福と思うのである。「私の幸福」とは、「私の所有する幸福」のことである。したがつて、このとき、「私」と「幸福」との間には、定義により懸隔があることになる。

所有者は、所有物ではないからだ。主体は、客体ではないからだ。主体「私」は、客体「幸福」ではない。「私」は「幸福」ではない、つまり、「私は幸福ではない」。

個人がそれを所有するという仕方では、人は幸福ではあり得ないのは、幸福は所有物ではないという理由よりも、むしろ、「私」は個人ではないという理由によつてゐる。いやさらに言うならば、「私」というものは、じつは、「ない」。ないものが何かを所有することはできない。それで人は、「私は幸福になりたい」と思う仕方では、幸福になることはできないのである。

思ひ込みの根は、辿るほどに深い。「私は私である」「私は個人である」「私は存在する」、「私」をめぐる長い深い思ひ込みは、さらに、したがつて、「私は死ぬ」「人生は一度である」「だから私は幸福にならなければならない」などの観念へと分岐し、いよいよわれわれを駆り立てることになる。

「死後幸福になる」という奇妙な観念は、その一変種といえるものだが、ここに端的に見てとれるように、われわれの幸福の観念は、生死についての観念と分かち難く結びついている。

「死後」もしくは「来世」の観念の有無で、人の幸福観は劇的に転換するのである。人類においては、人生を、この人生に限定しない時代のほうが長かった。「私」という観念が、それと等しく漠としたものであつたために、彼らの幸福はもっと大きくて広い、何か天地自然のありようといったものに近かつたようである。しかし、科学主義的死生観が、われわれの観念のほとんどを規定している現代のような時代においては、「私」が存在するのは一方方向に前進する時間軸上の、ごくごく短い期間に限られる。その限られた時間の枠内で、私はなんとか幸福にならなければならないのだから、現代人の幸福は、常にどこかが脅迫的なのだ。

けれども、何が脅迫的といつて、「私は幸福にならなければならない」というこの観念以上に、脅迫的な観念はないのではなからうか。人はなぜ、幸福にならなければならないと思ひ込んでいるのだろうか。幸福でなければ、何が不都合だといふのだろうか。

「幸福」という観念を所有した時点で、人は必ずや不幸をも所有する。人間は言語的動物である。「幸福」は言語、「私」もまた言語、おそらくは、言語以前の何らかそのようなありようにとりあえずそつと添えられた名札のようなものにすぎなかつたそれらが、言語以上の何かを指示すると思ひ込んだとき、それらはその反対物をも明瞭に指示することになつたのだ。したがつて、人は思うことによつて幸福にも不幸にもなり得るといふあの言い方は、その意味で正確である。思うのはその人でしかないからである。

「心の幸福」という、わかるようでわからない領域においてのみ、それはそうなのだとは言ふかもしれない。われわれが身体的存在として、病いや飢えに苦しむとき、その苦痛は明瞭である。それは不幸なことではないか。

それならば、われわれにとつて、生存していることそれ自体は、幸福なことなのか不幸なことなのかという問いが立つだろう。生存しているというこのことは、いったい幸福なことなのだろうか。

一般に人は、生きてゐることを幸福といい、死ぬことを不幸という。けれども同時に人は、その生きるために労働することに不平を言い、生きるためには食べなければならぬという言い方をする。しかし、もし本当に生きてゐることそれ自体を幸福と思つてゐるのなら、その生きるために労働することも幸福であるはずだ。すると、生きてゐることそれ自体は、あるいは不幸なことだと思つてゐるのだろうか。だとしたら、なぜ人はさほどにまで死を厭ひ、避けようとして生きてゐるのだろうか。生きてゐることが不幸なことなら、死ぬことは幸福であるはずである。いつたい、生存していることそれ自体は、幸福なのだろうか、不幸なのだろうか、どつちなのだろうか。

生死それ自体と、幸、不幸とは、じつはこのようにまったく関係がない。生死という形式は単純な事実だが、幸、不幸とは、それに付与されるところの観念だからである。したがつて、生存していることによつて発生するさまざまな身体的な苦痛も、身体の苦痛という事実なのであつて、不幸であるという観念なのではない。もしそれが不幸であるなら、それはその人が不幸という観念をそれに付与しているからにすぎない。

「にすぎない」とは、しかし、おそらくは、身の丈を越えている。身体の苦痛は、多く、人の心を不幸にする。苦痛は苦痛として明瞭にすぎる。しかし、だからこそ、身体の苦痛は心の不幸ではないという単純な事実を知ることが、われわれの幸福の新たな端緒となるのではなからうか。

いかなる理由によつてか、われわれは死すべき身体として存在する。人は、快樂の無理由は受け入れ易く、苦痛の無理由は受け入れ難い。「なぜ(よりによつて)私がこのような快樂を受けるのか」とは問はず、「なぜ(よりによつて)私がこのような苦痛を受けるのか」とのみ、問うのである。しかし、快樂とは苦痛の裏返しである。身体の苦痛は心の不幸ではないのだから、身体の快樂は心の幸福ではない。すると、心の幸福はどこにあることになるのか。

池田晶子著『あたりまえなことばかり』(トランスビュー、二〇〇三年)所収
「幸福はどこにあるか」より一部抜粋